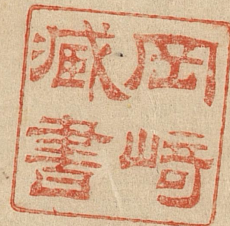


漢川南峯一覽

平聲部
下



美豆

淀の大橋の南成の里より則京街道の順路ありて... 美豆の所故とて廐の

五月あたまの五枚の満ちもまわれば... ともみ

朝みくづの上野は... のきのきのの... 且あがりつ 順徳院

木津川

水源ハ伊賀より出... 山城和東より出... 水と合流... 未だ淀川より一名

淀大橋

右木津川にあり... 間小橋... 大橋の北より大橋と小橋の間より有

淀大渡

木津川中流の西より北に流れ... 淀川と合せ... 大いこれと

南に通... 大橋向小橋中橋と... 淀の... 毎日は...

淀大橋より... 行程九里あり... 颯沓齋勤三云... 淀の... 水の...

淀大橋

五月雨

何くそよ
くむ

淀の人

鞭石

船

声のわくぬき

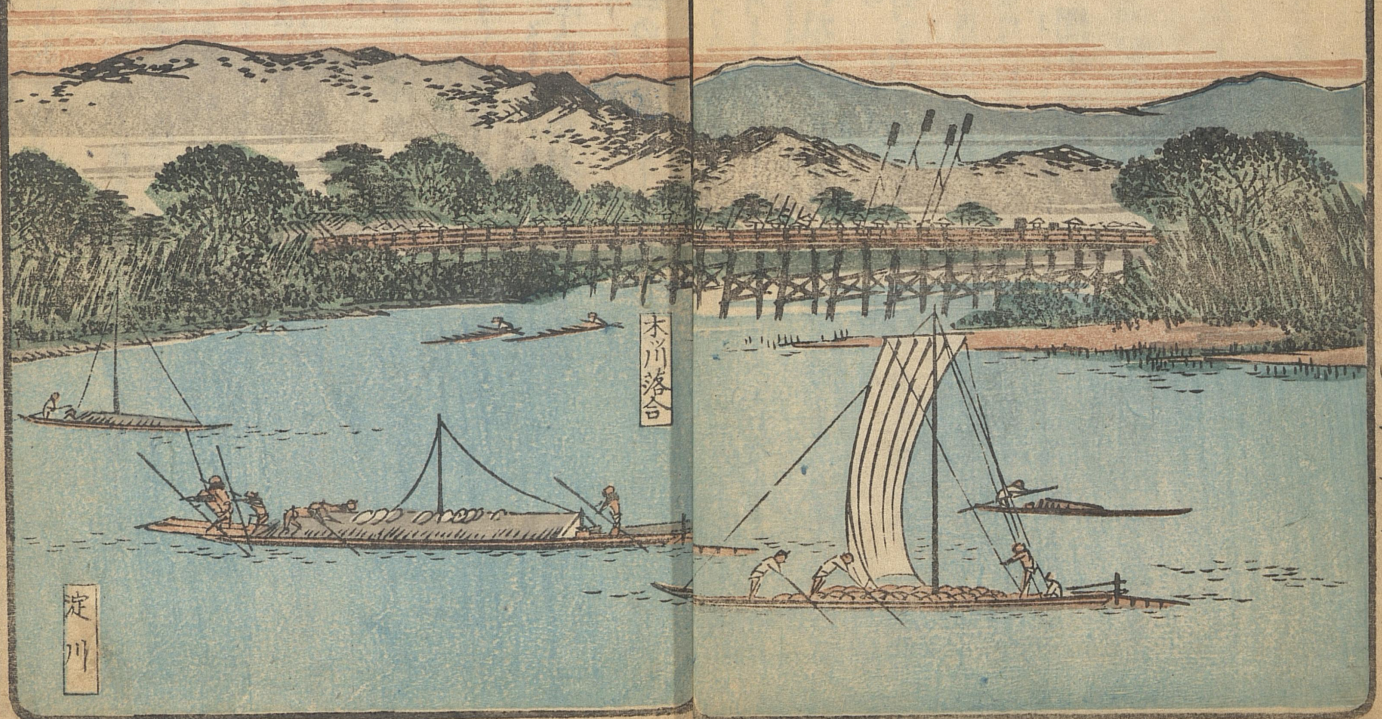
稀

すそ

ゆらゆらの

川

歌城



木川落合

淀川

りも桂川鴨川宇治川木津川水のち合くふられはよとわくさるる

淀城

其初治城主頼朝がまづ前より其後豊公の清藤中は西に宿するは
より淀殿と号し茶亭渡川の汀ありあう美景あり城中に大橋
より小橋ありて工家商家外とつるの多しと云ふは法隆寺の
小橋の南岸に諸のありて上り下り自由なり柳智徳ら第一の繁花なり

淀河

河内伊賀 河水の常は溶々と流るる流れ難波津に往く舟の
舟波母津 舟波母津 舟波母津 舟波母津 舟波母津
昼夜もふ間断なく城郭の汀より水車ありて波は随ひ翻々と
あぐる領主の茶亭橋上の往來の美景遠々として足びとて夏
さう又此所の鯉の名産として殊は美味なり高貴の献上なり

淀小橋

城廓の上より長七十六間橋下の大間は鐵燈籠と釣終夜灯と燈は
通舟の便なる美事なり此中より水上九十二丁十間といふ

伊勢向宮

小橋の東より天照太神とまつる此は浮舟なり洪水の時とす
伊勢向宮 伊勢向宮 伊勢向宮 伊勢向宮 伊勢向宮

巨椋大池

伏見の大池より長二十九町幅十五町といふ
川を以て傍より二帯は廣徳なり船中より見ればわづら入江とも

伏見

此池より花洛といふ程二里日本紀にのり見とまり和歌よみ
作のやうなる里と海あり又伏水と書るる宇治川の流水此所を伏見
と云ふは後世とす伏見と書るる一は民村九郷ありて

東御所

文禄二年秀吉公御在御より町小建後とて西国より東国北国へ
の往りあり町敷二百六十余町舎屋六千二百余軒とあり是より京原より
東御所と本より西の道を行田御所といふは其便宜は任り

城辺の魚と用

俗にこれと云ふ故に常は遊獵と禁れ
故に常は遊獵と禁れ 故に常は遊獵と禁れ
故に常は遊獵と禁れ 故に常は遊獵と禁れ

淀城

御茶屋

きののり

軽のうらま

わらき

梅室

白木の

あけあし

淀の水

言水



上
二
三

其二

漢河東豈

帝王別二

月春風上

瀨舟却訝

蓬窓猶有

月夜來白

雪滿汀洲

釋元皓

川風の菖蒲

ふさふさ

渡の町

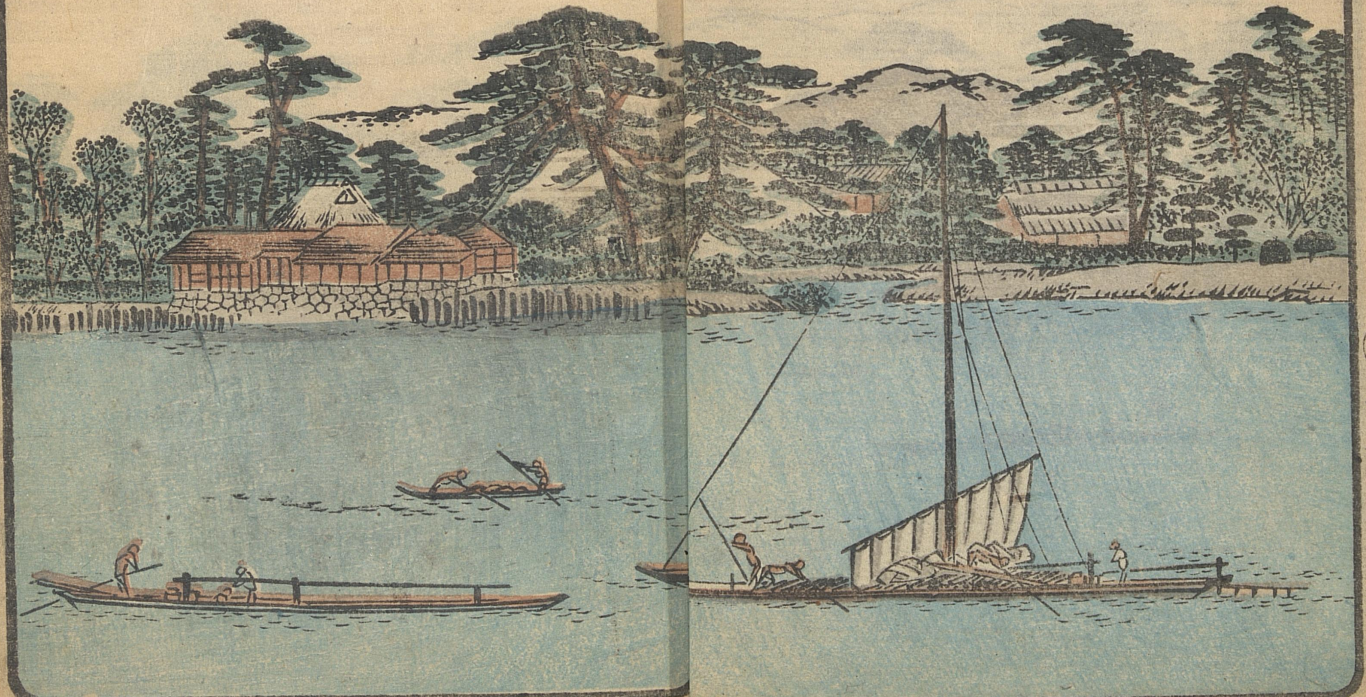
曲水

とよの楳

涼からんそ

渡の舟

柳室



二
三
五

上
二
四

其三

さな棹も

及ぶはうれし

初あまきつ

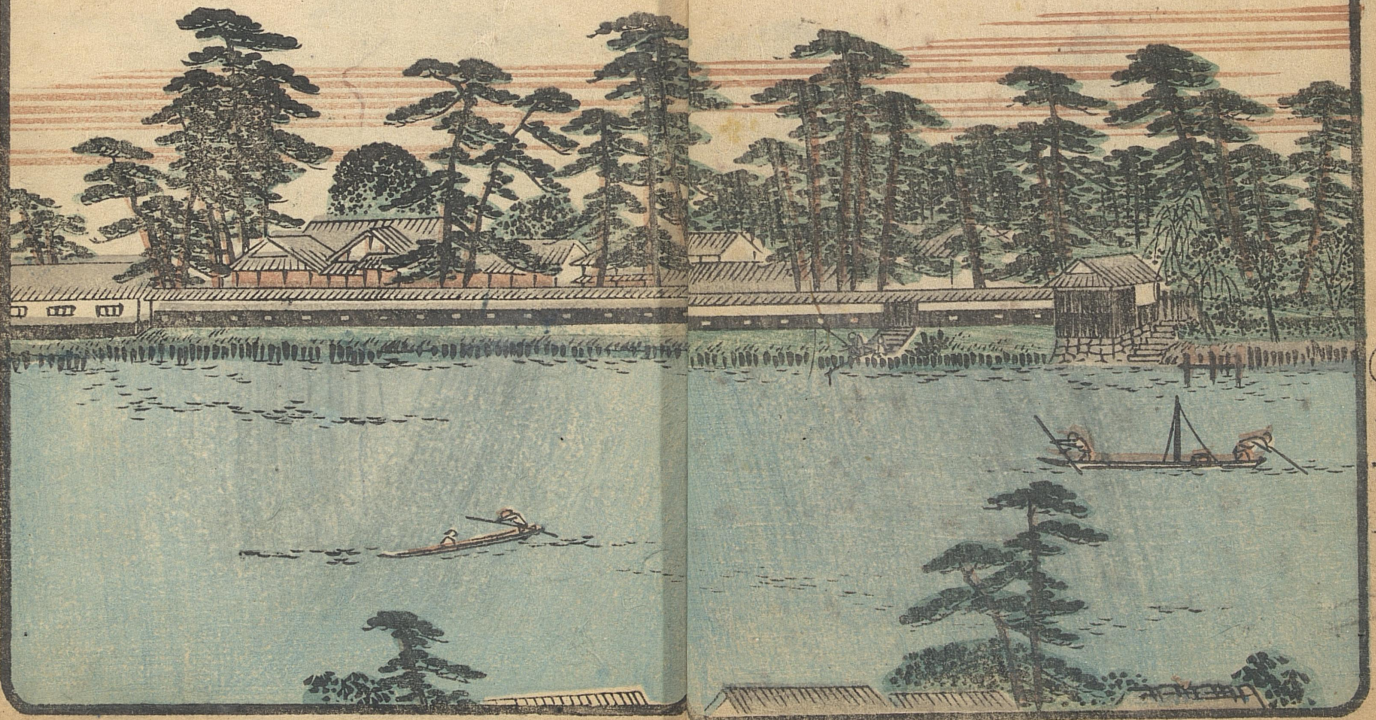
はげ波の

あつこ

冬降

西山雨晴
曉落花漲
漢津城頭
水車子酌
取萬斛春

巖垣彦明



其四

水車

渡のらふの

修理あり

つらとらふ

まは

らたをせし

あしねもの

うし車

まこもは

さめ

る

子奴まら

漢のみ

う

宗因

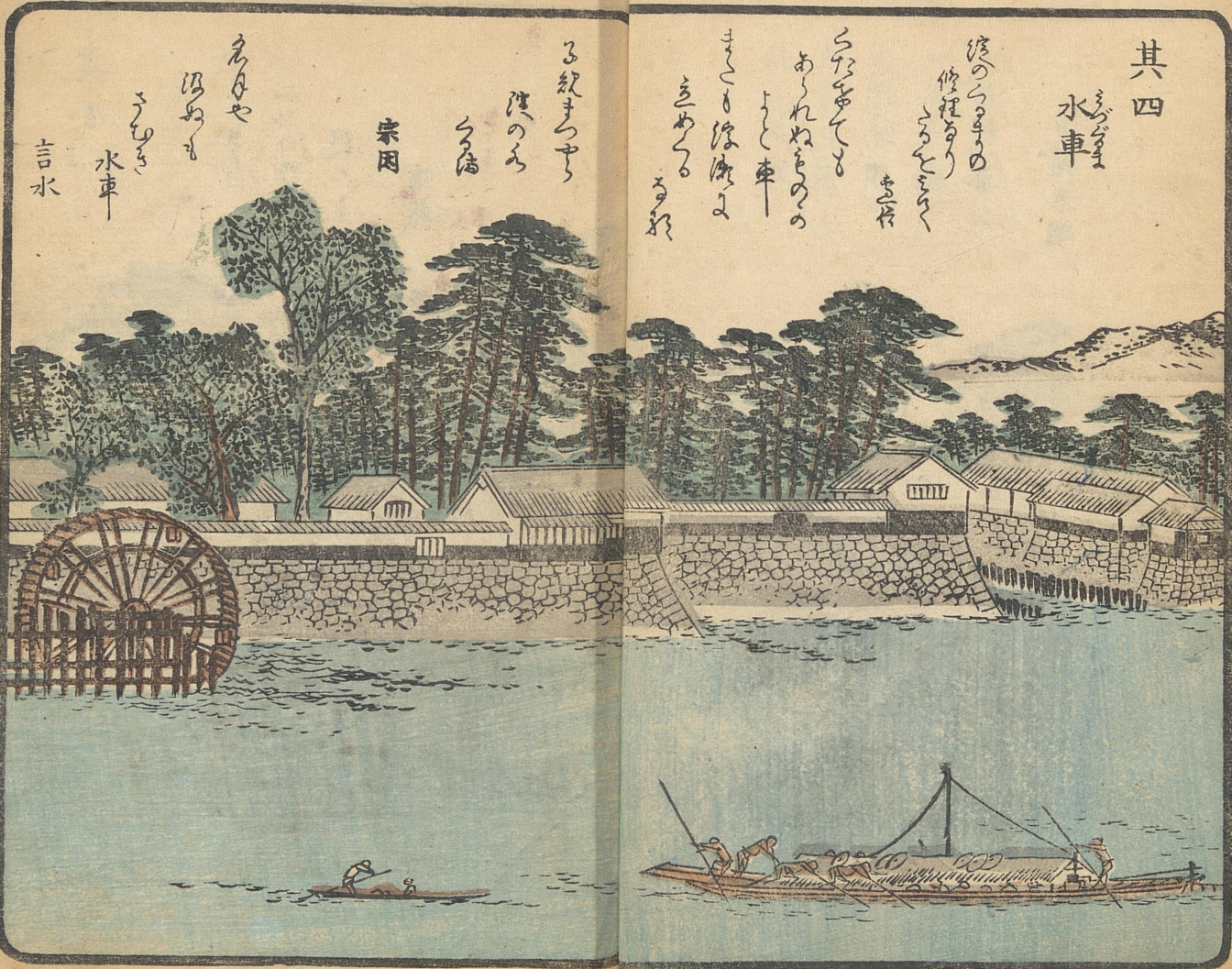
名月也

沼あり

うし

水車

言水



此
三
六

其五

あまぎの

ニツの橋と

渡の系

惟然

境

灯々や

渡のこ

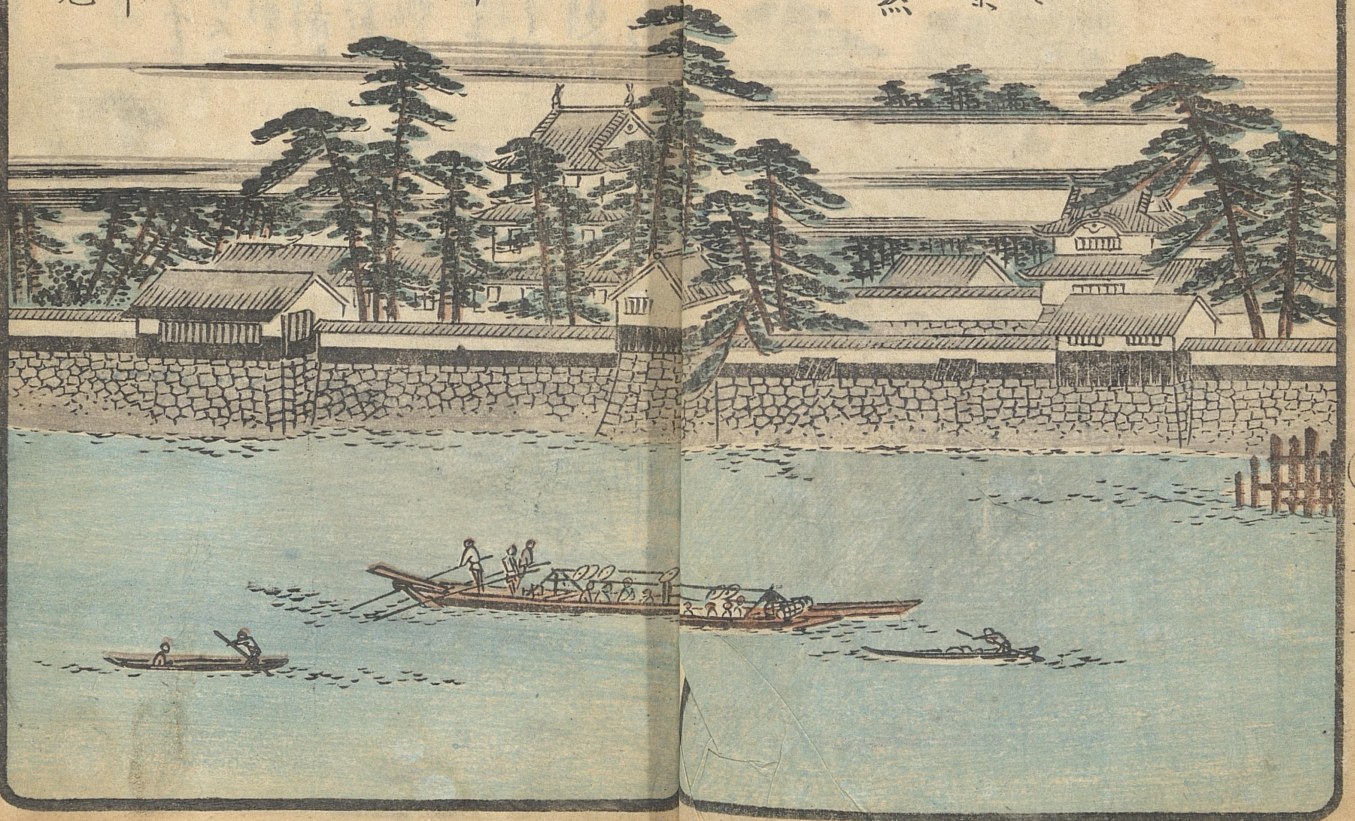
尾貫

水鏡や渡の

脚

あやめ羊

順也



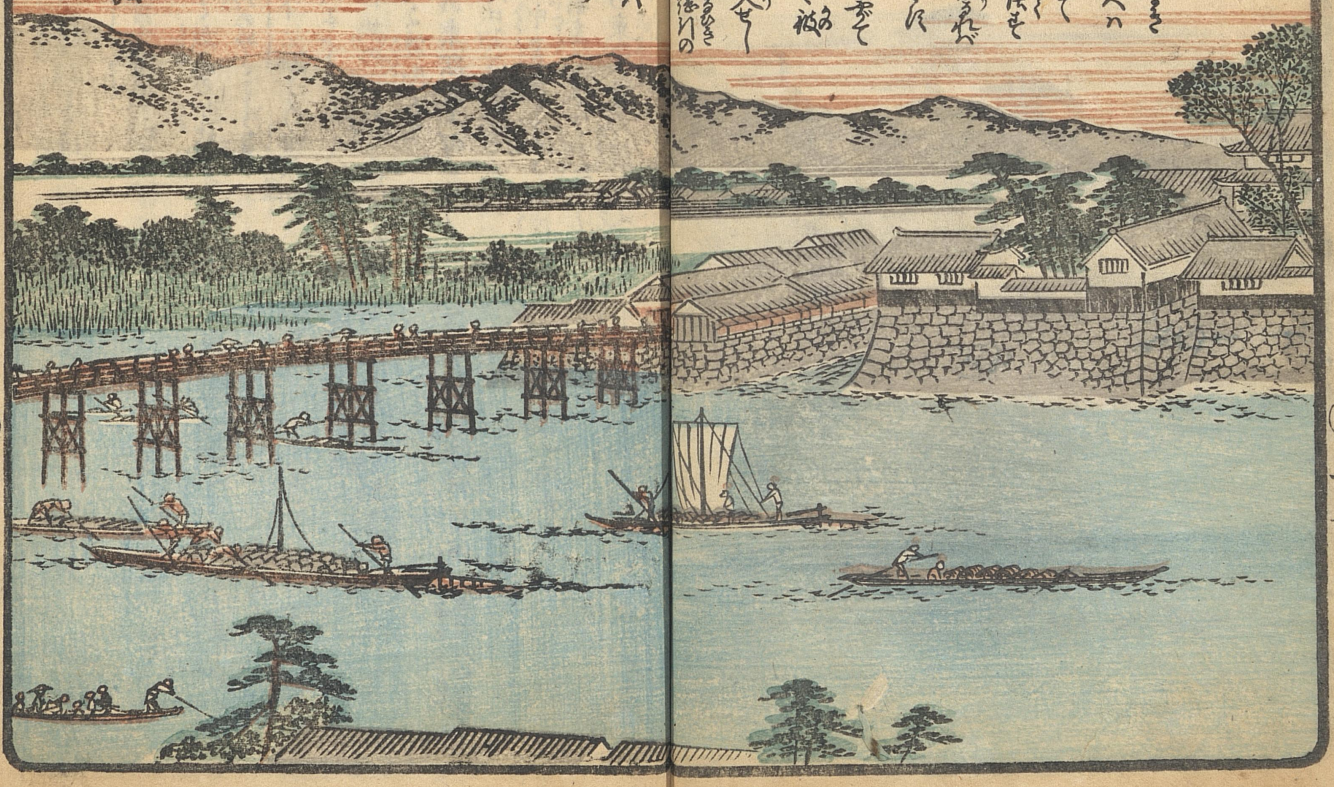
川
上
舟
橋

其六 小橋

橋の比港一三泊屋といふま
 貨倉店ありに船の人の
 かはて高き一物一物と
 びり一物とせよと上座ま
 是より川流の流多れ
 つるまを全とせよ
 徳のいまと如うと削る
 伏見といつる客もま
 まのまなごといつる被
 下敷とありはき
 柱のいれに理屋
 親仁も目とめぬて徳川の

橋の灯も
 あかり
 みる

千山



新吉 夏か入道と絶ね長舟の舟の里の香の下に 有家

朝戸明く伏見の里とらびれぬ急よせの河波 俊成

此余野の沢田とて故人の和秋より尚名所旧蹟を以て者となすも夏にげれぬ

これと譽れ只後生のかこころをいふてかつてを一二とらるるの

肥後橋 伏見の入口下三柵より西渡田より長十五間半 京橋より着岸の

三柵社御旅所 肥後橋の東詰より例祭九月十六日生土の神楽

住吉神社 肥後橋の東船大町より宝藏院これと守護に東濱より着岸の登り

今富橋 東濱より中書島より橋の長十八間幅一間六尺一寸

中書島 今富橋の東詰より一説に文禄年中向嶋の壘と築くといふは中書

荒廢の地とありて後世に女門といふ所の江口神社は津へ渡船の船と

辯財天社 中書島より本宮 辯財天女の像に弘法大師の作といふ例年六月廿五日

京橋 今富橋西詰の北の方の濱より北へより北詰と京橋町より橋の長二十二間

當橋の辺より浪華より京師より上下の通船此石今井弘或の傳道の荷

船木の船岸より夜とく昼とく出入の船と間断り且都に通る

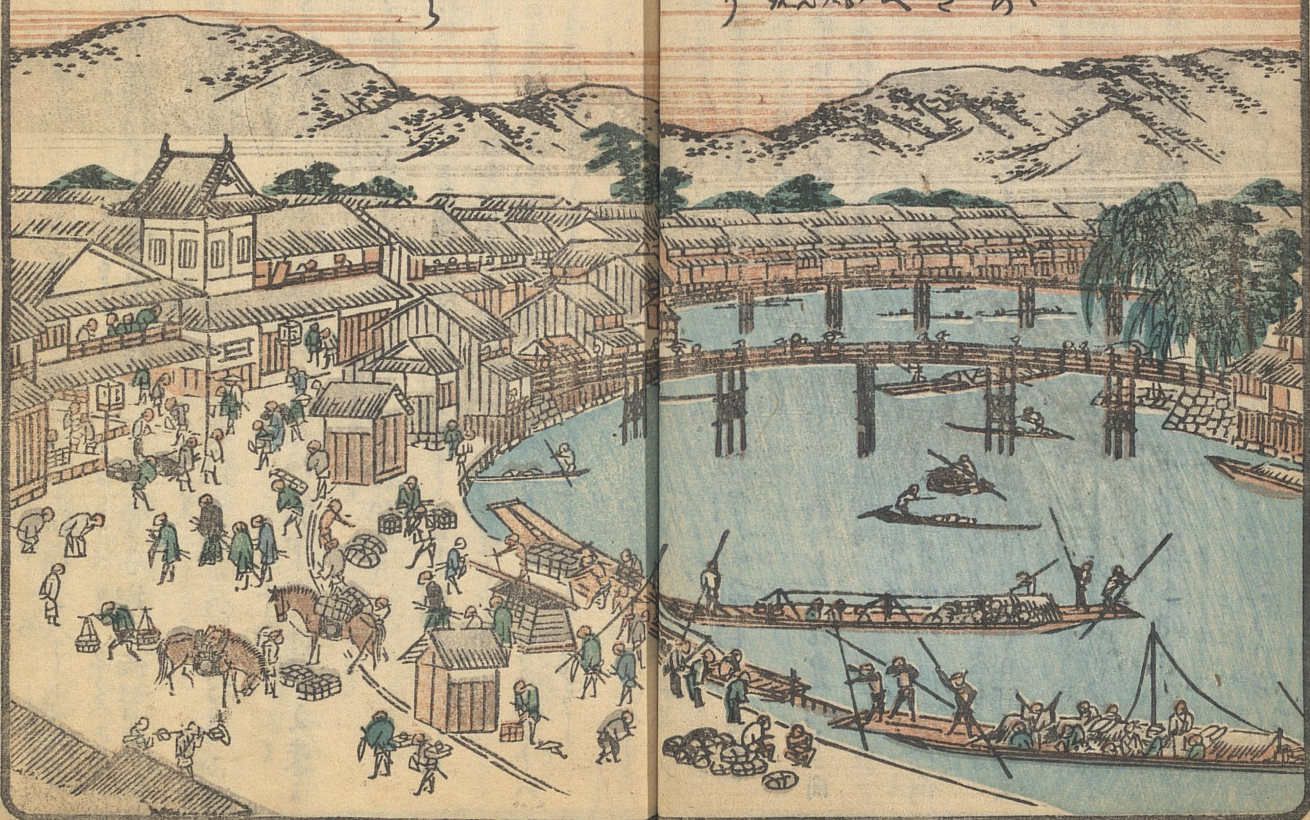
高瀬船宇治河下河紫船かどく拳と喧く京摂の往返関東

上下の旅客群集の地なるが故に旅舎貨食家の多しは言も更

なり土産物の商家旅行用具の正店脚店軒をつらぬくありと

伏見
京橋

當摺の北落東北の
角は城壁の遺蹟
坂樓のりりく
伏見の城の遺風
うらべ一奇観
うら



主要の紹介
うらべ一奇観
うら
もの接人
さうねいよ
本宿
袖彦

敗ぐされきやうに船ふね上うへの老若下らうじやくの男女おんなづれも船宿ふねやどへ入いりて度どと
調しらへ故ゆゑに烟草揚たばこあがり技わざ紙しの填うみ菓子かし燻くわん頭かぶとも入いり童子どうし銭ぜにの両替りやうかひ青物あおもの
賣うり按摩あんま接あは肢しの療りやう活くわく人ひと本堂ほんだう修しゆ復ふくの勅しやく進しん傳でん立たち入り入いりかかり此こゝは
末すえに數かずささむ飲いん食じやくとんが度どの上うへ客きやくられられ下くだ客きやく迎むかひよまる
船頭ふねかぶりり暫しばしも静しずかかららるる皆みな此こゝの縣あゝひひささる

阿波橋あわはし 肥後橋いごへはしの川がはに上あり香か渡わたりと云いふ也なり船ふね着ありて方かた々々最もももととと

蓬萊橋ほうらいはし 京橋きやうはしの上うへ南みなみ淡たん町まち中なかつ書かき島しまの長なが橋はし三さん十じゆ二に間ま幅はら二に間ま此こゝ橋はしとと云いふ

此橋こゝ條ぢやうと北きたへ下くだ板橋いたはし通とほります

深草ふかぐさと經へて本街道ほんかいだうと云いふ

車道くるまぢやうと北きたよより

御香宮ごかうみや 本ほん社しゃ祭まつり神かみ神かみ功こう皇后こうごう后ご

九所堂くしうだう 拜殿はいでんの傍そばにあり

御炊殿ごひでん繪馬舎えうまや本地堂ほんぢだう

賽石さいせきの傍そばにあり

御香水ごかうすい 拜殿はいでん南門なんもん

飲淨寺いんじやうじ 淨土宗じやうどしゆ

深草少将塚ふかぐさしょうしやうづか小野この



小町塚 この町のつとりの小町の塚 少將通道 少將の通道の 道元禪師石像 道元の石像

御所入 御所の入り 後松の始末 後松の始末 淨土寺 淨土寺 七瀬川石墳 七瀬川の石墳 墨深井 墨深の井

竹の下道 竹の下道

續千 續千 澤草や竹の下分 澤草や竹の下分 前園皇政倉 前園皇政倉

種木町 種木町の 本名多比町秀吉公伏見御在城 本名多比町秀吉公伏見御在城 渡辺掃部 渡辺掃部 前石八左衛門 前石八左衛門

慶長九年十二月願城町と免許 慶長九年十二月願城町と免許 藤原の天井板 藤原の天井板 東武の人 東武の人

菜の花や粟 菜の花や粟 這入浄水町 這入浄水町 何狂 何狂

新井や畑 新井や畑 可風 可風

墨深 墨深 寛平三年堀河太政大臣昭宣公 寛平三年堀河太政大臣昭宣公

覺 覺 給ふ時上野岩雄哀傷の和歌 給ふ時上野岩雄哀傷の和歌

墨深 墨深 嘆 嘆

赤子の涙 赤子の涙 今 今

康頼入道の室物集 康頼入道の室物集

其 其 墨深 墨深

世継物語云 世継物語云

ひう ひう 世継 世継

墨 深 すゝみ
有馬 稻荷 ありま いなげ

橋 はし
おもと
うのうの
咲ゆらぐれの
墨 深 すゝみ
鶴 成 つる なる



墨江の長う世の元整ちりてれりてりてり

墨江深寺

同前南例らりてり
生時日蓮宗

當寺ハ往昔清和天皇降誕の地なり小室大権

祈りてり大相國忠仁公の建る所 貞観寺の旧地なり慶長の頃方丈

書院巍々として秀吉公の所成あり又什室より豊太閤の

衣冠の画影あり長谷川等伯の筆に新徳の上より秀吉公自筆の

和歌あり 太閤これとつて於傍より用ひまひりたり

のりれりてり昔とてりてり梅木の花の面影墨江ありてり

墨江深寺 堂前より古きふりてり後世よりゆりてりてりてりてりてり

墨江の地をよきとてりてりてりてりてり

羊子の身墨江深寺かむはりてり 徳元

墨江の地名世よ名なり今ハ伏見御所よりて徳舎貸舎家建

つてり歌舞の声系竹の音平けりてりてりてり

藤森神社 本殿三座中央舎人親王 東ハ早良親王 西ハ伊豫親王と

祭る 舎人親王ハ天武天皇の皇女ありてり天平宝字三年より追尊ありてり崇道天皇

末社 八幡大將軍 菅大臣 熊野 嚴島 諏訪 旗壇 本社の東にありてり神功皇后三韓

神樂殿 御供所 力石 例祭五月五日神樂渡御

藤杜岐道
ふたのりりんまら

栞

うや

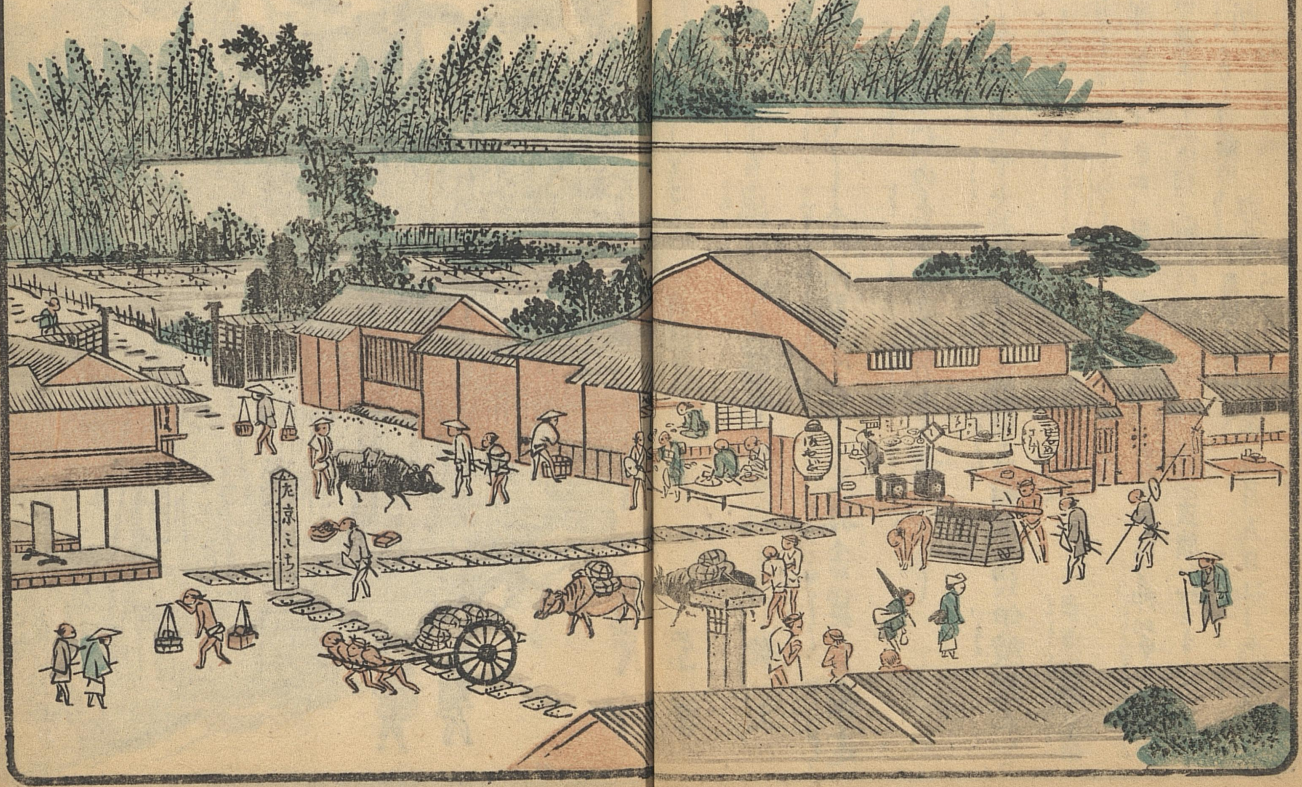
伏見

牛の

ひら

や

南船



伏見
藤森社



あり 産子の膏宮より神前壘とあがり景日一の橋より福前藩の表より朝より

走り馬のつづれも軍陣の行掛とす天下平安の祈り候とす
深草里 勝地にていづれより宝篋の山莊寺院の大層多し一帯の形

又此里の名産は土産風俗その外土細工の人形
又此里の名産は土産風俗その外土細工の人形

人形の西りのつづれ花見んと群つて通るふと秘乃 天地根

春女

去来

瑞光寺 浄土の草創法苑通場 本尊釋迦佛 長二尺胎内五勝六腑はう

佛殿の西にあり塚の上は竹とてゆえ改法障きふ

わが源中よりけり 秋の表 灯外

鳥の跡 乙由

昭宣公墳 瑞光寺の門をわたり大塚として周廻十間余あり

霞谷 北に宝塔寺の池よりすまふ深草のあり

おのひやは苔の下を歩くとせしれは谷の草の多言 家隆

極楽寺旧跡 瑞光寺宝塔寺の境地より

寶塔寺 瑞光寺の北にあり 深草山と号す 本尊釋迦佛 多寶佛 高祖日蓮上人の像と安ん

極楽寺旧跡 保胤が極楽寺の賦より東山の勝地とて賞せり

寶塔寺



上
二
三
四
五
六
七
八
九
十

廟塔 目録上人書と云の石塔あり 釋迦千射堂 七面明神社 此下日蓮日朗の遺骨と云い 七面明神の鳥居の額に元政の筆に例祭九月十九日

當寺の旧極樂寺と云い真言律と兼なり延慶年中より法華道場と改む 石峰禪寺 宝塔寺の元は隣 本尊釋迦佛 左右に聯めり共ニ同筆なり

藥師堂 本堂の傍より本尊藥師佛 表門 額に即非の筆にて 當寺の黃檗の六世千景和尚の因基にて黃檗退院の後此地に

住職と近年安永の半より天明の初に至つて當寺の後山に

石像の五百羅漢と造立し靈鷲山と爰よりつら其形勢

釋尊說法の体相と作る 釋尊の像の三尺許の自然石と云

を西露の覆るゝて山中に充満し自ら苔ひり其雅なりと

言語に絶せり実ニ無双の奇觀と云ふ

稻荷神社 伏見街乃より此街を覆橋より南に 本社第一宇迦御祝神第二

素盞烏尊 宇迦御魂神の御父なり 第三大市姫神 日神母 已上三座往古三峰

小宮田中社 大巳貴 四大神 五十猛命大屋姫 此二神と加へ保て五座

と稱ひ 弘長三年に告げらる 樓門朱の玉垣きりびやり小権殿禮殿

舞殿末社神庫繪馬舎鳥居木巍々として神官館社僧の坊舎

伏見

稻荷社

神門臨大道

元午晨靈辰

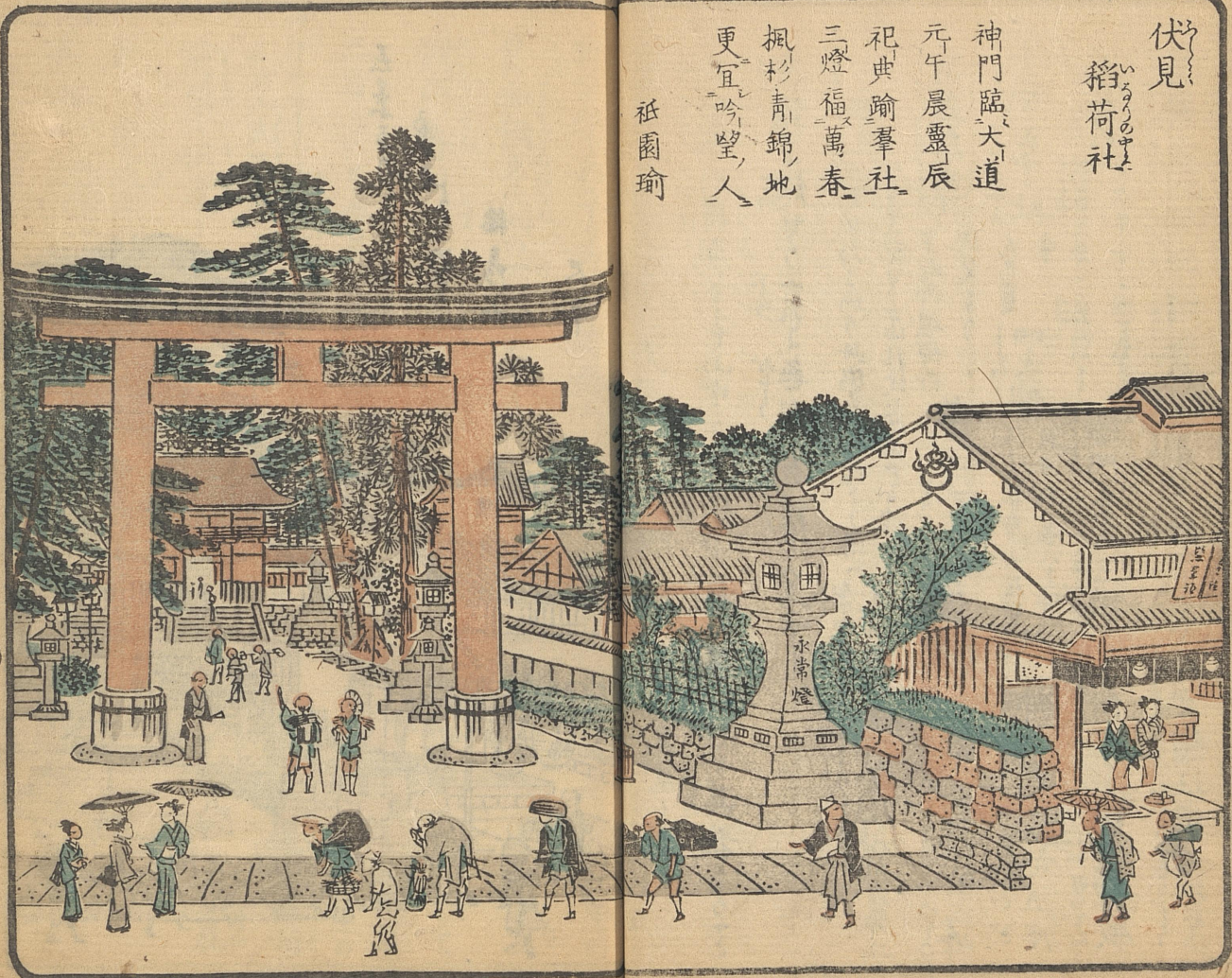
祀典踰羣社

三燈福萬春

楓杉青錦地

更宜吟望人

祇園瑜



殿士観音 虚空蔵 各座 檀の隅ハ四天王東西の殿檀より帝釋天

及び達磨大師并百丈禪師臨濟禪師関山國師等の像あり 佛殿の 後面

釈迦十八天衆と 法堂 佛殿の 選佛場 方丈 法堂の 傳衣閣 東

関山廟 其餘東司鎮守社十三層の石塔鐘樓庫裏

浴室山門巍々々々 伽藍の美觀言語絶せり 通天橋ハ法

堂より祖堂へ通路の流溪に架せる橋下の溪と洗玉礪と号し

左右の崖ハ悉く楓林として秋の季ハ初ねが恰も紅錦と浪は

が如く所謂洛陽観楓第一の勝地なりとる 徑ハ文人墨客詩と

賦一教と社にて懐と述べて都下の男女打群々酒宴と催し紅顔と

夕陽に争ふ十月十六日ハ関山忌 聖一國師 として世俗此日と辨當

收と称し観楓と号し遊糸と号し又二月十四日

十五日ハ佛殿に涅槃像の大幅 北殿司 懸り請人小縦観

せむ遊客これと号し始と号し群集ハ

涅槃會や東福寺ハ帆と号して 圓ノ

関山忌と号しハ苗主の稻荷山 浪化

三之橋 東福寺の傍外伏見街道に有 二之橋 同秘乃三ハ境外九八町の間に二の橋

流るハ洗玉礪より出ぬ 流るハ常樂庵の奥より出

東福寺

通天橋

橋高

ハコ

きり

村々

辨石

甲

乙

丙

信末

信徳



上ノ
下ノ

上ノ
下ノ

一之橋 東福寺山門前伏見街道の北一町余三つ水原新熊野社の良の谷より
ゆる右三橋より流れのまは是より西の方にて加茂川に入

しつ時雨 一二おろし 牛笠盆 荷今

子規 一二おの 橋の秋あけうも 其角

龍尾社 一の橋の末傍にあり 拜殿馬舎末社神典藏あり 近年再管のり 本社及び
拜殿あり 美敷より境内三葉の楓あり 是所謂真の楓樹なり

大佛殿方廣寺 同伏見橋のゆかり 寛政十年七月雷火に焼く 其礎石の
残り百分一のみ 像再建あり 又近年大像の半身成就 假堂あり

當寺に往昔天正十四年豊臣秀吉公の御建立より本尊の廬舎

那佛の座像長九間四尺五寸中十三間二尺四寸後光の高と十八間五尺

棟高二十五間佛殿の西向より 東西廿七間五尺五寸南北四十五間八尺五寸

二王門 十五間三丈余 高十間二尺金剛力士の長一丈四尺拍犬高七尺南門 高三間半

棟高五間鐘堂四間四方柱數十二本鐘 高二丈四尺指と 堂前二建

石燈燼より列國諸候の名と刻む佛殿の敷石又正面石垣の天石より

國々出陣の名或は諸候の紋所あり 廻廊の外より櫓を交えて

柱たり 慶長元年閏七月十二日地震より 佛像と崩れ

秀吉公其後信別善光寺の弥陀佛と迎へ安置し 同二年八月善光寺

は 歸座同三年又大像を造同七年號失此後銅像を摸り然る鑄損

下

大佛門前

耳塚

納藏當時築小止
毘盧殿畔土饅頭
雲關寬恨雜林月
濤送凱歌馬鳴舟
古薜兩穿聲微底
孤墳草翠色含愁
偏憐京觀非魂宅
聾絕鄉音不可求

餘易

耳塚

蚊のうぐ

声もまうり

丸士

耳塚

まろく声

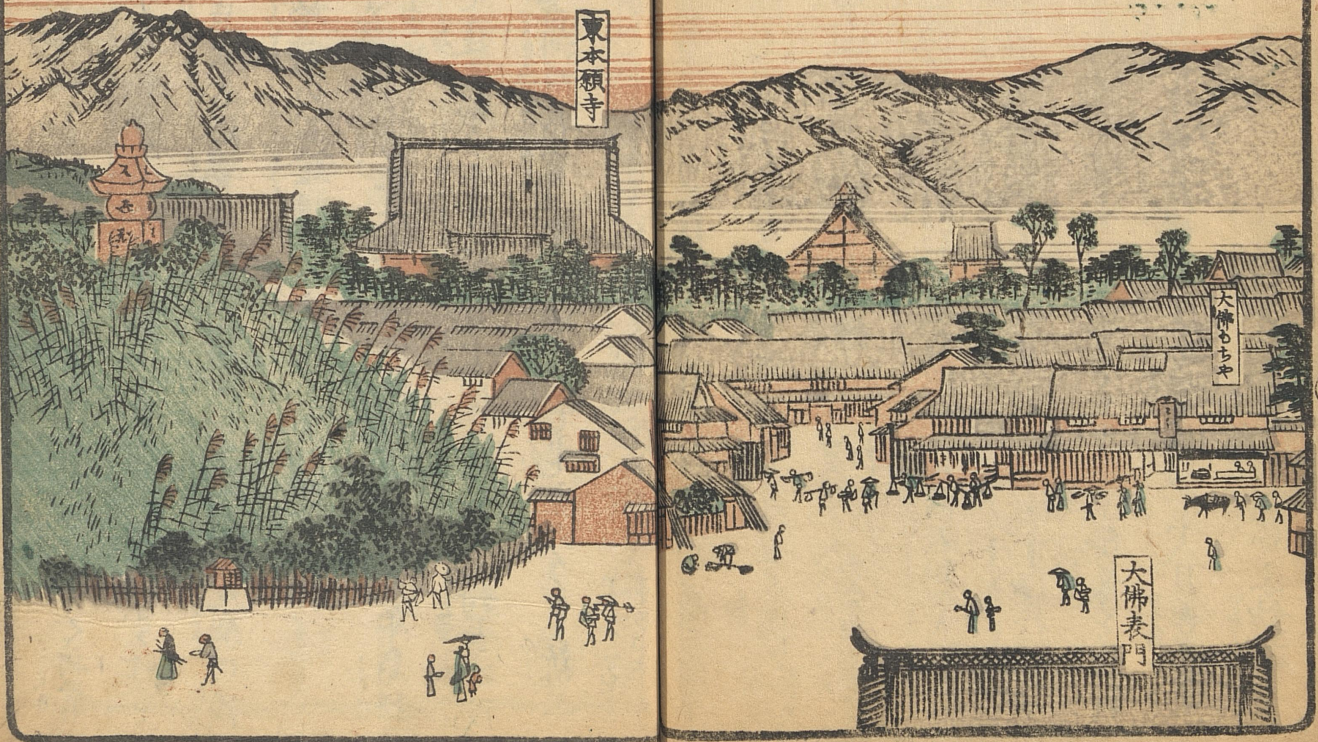
つれ郭公

柳亭

東本願寺

大佛もちや

大佛表門



大像より出火して佛殿より回祿は同十五年秀頼公より再営
り寛文二年本尊銅像を改め木像より北山浄住とれと
彫刻は太閤秀吉公の石塔婆の佛殿の南より豊國社荒廢の後
是と營しより塔前の石燈爐より慶長十年九月より

蓮華王院三三間堂 大佛殿の南より 入皇七十九代崇徳院御宇天治元年鳥羽

上皇の本願よりて建立あり千手觀音千体と安坐し得長壽院

と号し其後又後白河院長寛二年御願よりて建立あり新小

千手千体と安坐あり 此時改め蓮華王院と号し本尊千手

觀音の座落して長八尺康慶の作りより二十八部衆あり檀上より安

置の千手千體へ堂内の左右より座より運慶法慶のありより堂を

東向 南北卒間尺四六分東五八分三寸 棟高六間尺六寸 近世若士此堂に後

耳塚 正面二門のあり 文祿元年朝鮮征伐の時小西行長加藤清正と大将より

数りの敵兵と討取首と日本へ渡さん事益よりれが助勤より送り

しと此所より埋り耳塚より

名物大佛餅屋 耳塚の西より 大佛殿建立の時より此後より賣みむより

唐破風作の額標版へ正水の筆より代りて其名高し

大佛北門前馬町とある趣き大津に至る御所なり是と瀧谷城と

号く 山科郷津陵村より昭陽寺より東へ移るに物舎を築きしより向ふ

継信忠信石塔 永仁三年二月二十日施主法西云又一基ハ後身

一説より此辺に等光寺あり寺あり其寺の寄附塔ありんと云

山城志云元在六条坊門松屋町大安寺寺廢後石塔于此た

佐藤兄弟の事其證なり 右ハ赤いといふ谷城の遺蹟ハ次下これト同一

三嶋神社 衆人群赤は堂所の生土林あり産子ハ二代親と禁じ喰ふと云

糸神三座 大山祇神 木花開耶姫 岩長姫ホの三神なり

源平盛衰記云大臣常居りひる四方ハ四十八間と點一一方

十二光佛と一体ツ立たてまつり其前毎ニ常燈と燃せられ

四十八の燈籠あり故ニ此大臣と異名ニ燈籠の大臣とぞ申さる云

斯くのハ此小松谷より山莊に於ての事なり

正林寺 驛町の東より小松谷より浄土宗開基ハ

本堂 殿舎つらうして南向あり此地ハ月滿禪定兼實公の旧跡

中央ハ圓光大師の徳と云ふ此余阿弥陀堂岡山堂鐘樓經藏方丈庫裏

鎮守 樓門ホ巍々たり兼實公の御所なり時小松殿と号せり

法然上人此殿の御堂と云ふ

黒谷傳記ニ見へり

燈籠堂古蹟 正林寺の西の方人家の北ニ谷あり是と小松谷との此所小松内大臣

千手観世音菩薩の像は、無量壽菩薩の像とて、源空上人

玉章地藏堂 小坂谷の東にあり、樹々の左傍あり、木も地蔵菩薩座像長七尺余

傳云此尊像小野小町の作なりと此人顔色さへびまるとして深男

ホをと悩れどもと數つて親疎と分つて艶書と綴つて降雨の

如く老後愛執の罪と悲んぶ滅罪のち自ら此像と作

其艶書と集めて腹内に藏む是故に玉章の地蔵と号するなり

昔不道者らつて腹内に艶書ありと傳へ聞くとれと抹へり

尊像と信じて破損と補ひ手自張る彩色も加へりて我腹

内は長三尺許の石の五輪あり銘と慈眼大姊とあり年月は詳ならず

又一説は深草少将玉章と此地藏尊に奉納して小野小町と相違

の縁と祈るなり何れも是なる哉とて

清閑寺 玉章地藏の東藩谷樹々の下にあり、延暦二十一年詔繼嗣基とて

本尊千手觀世音 立像長三尺余、菅公の作とあり、客殿の庭中にあり、一説は六条院

高倉院御陵 右本堂の北半町許あり、山の内は二間半四方石階と横上り

くひ露の草すへこの紅葉はなまらうらやまうらやま夫とてなり 御製

御製

**PAGE(S)
MISSING**

小智局墓 同陵の左の方より此局ハ高倉帝の御寵愛他ノ異なり一と云
横町中納言の女より妻くハ激平盛衰記ニ見へり

高倉帝の愛せしや給へ余風して今も尚此地ニ丹楓多しと云

暮秋の頃ハ錦繡と晒け分如く眺望せし美観あり

潘谷 小松谷の東三町の間の通称なり安ハ潘谷なり古ハ此所ニ寺院有りと云
後土御門院皇子播仁僧都と潘谷宮と号し

元慶寺 北花山潘谷街道の北の辺にありそと云天白宗近世禪宗と改む
花山法皇御剃髮の旧趾なり

本尊薬師佛 座像七寸僧正 脇士 阿弥陀佛 慈覺大師の作
通照の作なり 昆沙門天 運慶の作

僧正遍照像 自作坐像五寸五寸 花山僧正より俗姓ハ良峯宗貞
仁明帝の近臣より剃髮して當寺ニ住一終ニ僧正と云

花山法皇像 御自作共ニ一ト云 當寺ハ陽成帝の御願にて貞觀十一年ニ

女馬と云ふ
と云ふなり

宗永

塵外樓

大老女
ゆめりおのりや

柴のり

火の羽の
ちとまて

淀川兩岸一覽登船下之巻終



上リニ三三三

編著 浪荅 曉 晴 翁

畫圖 今 案川 羊山

備書 帝都 鎌田 醉翁

曉晴翁著

宇治川兩岸一覽 中本全貳冊

松川羊山画 追刺

文久三癸亥年序書發行

江戸日本橋通六丁目

山城屋佐之助

京都越前町錦小路

俵屋清之助

大坂心齋橋通小橋町

河内屋と持之助

書

肆

